

## 6. 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

# 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

キーワード： 養護教諭 スキルアップ 現職研修

## I. はじめに

近年の社会環境や生活環境の急激な変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えており、健康課題は複雑化・多様化している。養護教諭には学校保健活動を推進する中核的な役割・校内外の関係者、関係機関との連携におけるコーディネーターとしての役割・いじめ・児童虐待への対応など子どもたちの心身の健康問題の早期発見、早期対応等、専門職としての力量の向上が求められている。子どもたちの現代的な課題に対応するためには、養護教諭自身のスキルアップが必要であるが、各学校に一名の配置である場合が多く、養護教諭間で学びあう機会は少ない。また、職務内容も校種、勤務学校の規模などにより大きく異なり、求められるスキルも異なってくる。こうした状況の中で、スキルアップの必要性を感じていても個人での対応になりがちで、学びの広がりやスキルアップが望めない現状がある。小中学校では、近隣校との交流の機会（地域の養護教諭部会など）があるが、高等学校では、こうした機会も少ない。さらに高等学校では、生徒の生活地域は広域となり、扱う健康問題等も複雑になるため、より一層、相談者を得にくく、悩みや葛藤の共有も難しい状況となっている。養護教諭が職務遂行において抱える悩みや葛藤は多様であり、さらにそれらを他者と分かち合うことや、スキルアップのために、十分な経験を持つ養護教諭への相談ができにくい現状がある。

岐阜県において養護教諭に対する現職研修としては、新規採用研修・6年目研修・12年目研修等が行われているが、一般教諭の研修に比べ研修回数等が少ないことや、指導養護教諭が身近にいない状況での研修になっている。職務遂行において抱える悩みや葛藤、課題の解決が研修の場だけでは解消できていないのではないかと考えられる。また、新規採用後、養護教諭としての経験を一通り終えた卒後4～6年目にあたる時期には、転任による職務変化を経験する時期であり、自身の養護教諭像を模索し始める時期でもある。この時期、各養護教諭には経験年数に応じたスキルアップや、目指す養護教諭像の再検討が求められる。しかし、養護教諭自身に向上意欲があっても、スキルアップにつながる方法が見出せず、自分が描く養護教諭像を定めにくい現状がある。その結果、向上意欲の低下や、養護教諭の魅力さえも見失う場合も生じている。

これらのことから、卒後4～6年目となる養護教諭を対象に、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とする。

## II. 事業担当者

本事業は、以下の教員で実施する。

育成期看護学領域：日比 薫 山本 真実

機能看護学領域：松本 訓枝

## III. 事業（研修会）の企画

### 1. 養護教諭学びの会の開催

#### 1) 目的

卒後4～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とする。それにより、養護教諭としてのスキルアップに向けた意欲を養う。また将来的には、自主的な勉強会等へと発展することを目指す。

#### 2) 対象

経験年数4～6年目の養護教諭を対象とするが、希望があれば、卒業校・経験年数を問わず参加可能とした。本学の卒業生を含む、経験年数4～6年目程度となる養護教諭を対象に実施案内を送付し、参加者を募った。今年度は県内すべての地域に案内を送付した。

#### 3) 実施方法

本学会会場として、学びの会を2回開催する。参加の有無について返信を依頼し、その際、職務に関する感想（悩み・葛藤を含む）、今後学びたいことを募集した。

研修時間は1回あたり3時間程度とした。実施内容は以下に示した。

① 自己紹介

② ベテラン養護教諭の講話

- ・卒後4～6年目養護教諭の悩みや葛藤に関わる具体的な実践内容。
- ・ベテラン養護教諭が実践の中で培った養護教諭としての理念。

- ③ 悩みや葛藤、解決の方法等についてディスカッション。  
グループ編成は2通りとする。
  - ・経験年数ごとに分かれた養護教諭とベテラン養護教諭、大学教員によって構成する。
  - ・経験年数混在（ベテラン養護教諭含む）養護教諭、大学教員によって構成する。
- ④ 終了後アンケートを実施し、本会参加の感想、本会参加による仕事への意欲の変化、本会への希望などについて意見を集める。
- ⑤ 教員とベテラン養護教諭で学びの会の成果や今後の方針について意見交流する。

#### IV. 研修会の実施

##### 1. 実施内容

###### 1) 第1回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成29年10月28日（土）13:00～15:30

プログラム：講話「健康教育の進め方 ～これまでの実践から～」

郡上市立大和北小学校養護教諭 長村 珠美

グループディスカッション（経験年数混在型）

###### 2) 第2回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成30年3月3日（土）13:30～16:00

プログラム：講話とディスカッション

「養護教諭として思うこと・考えること」

岐阜県立関高等学校養護教諭 坂口 美保子

岐阜県立岐阜北高等学校養護教諭 川田 由美子

\*講話の内容を発展させて参加者全体でディスカッションを行う。

ディスカッション テーマ「養護教諭 異動の心得」

\*テーマに添って、経験年数混在型でディスカッションを行う。

##### 2. 参加者の状況

第1回学びの会の地域別参加者の人数を表1に、校種・経験年数別参加者の人数を表2に示す。

表1 地域別参加人数

	参加人数
岐阜地区	4
西濃地区	3
美濃・可茂地区	6
東濃地区	2
飛騨地区	1
計	16

表2 校種・経験年数別参加人数

校種	第1回学びの会			
	経験年数 1~3年	4~6年	7~9年	10年以上
小学校	4		1	3
中学校	1	2	1	3
高等学校				1
計	5	2	2	7

##### 3. 参加者の意見

###### 1) アンケート調査結果

研修会の終了時に評価のためにアンケート調査を行った。質問項目は「研修会での学び」「研修会に対する意見」とし、自由記載で回答を求めた。昨年度から継続して参加している養護教諭が多いことから、アンケート項目に「スキルアップを図るために、今後どのようなことをしたいか」「若手養護教諭が育っていくために取組むと良いこと・課題だと思ふこと」を追加した。1回目の学びの会では16名に配布し11名から回答が得られた。回収率は62.5%であった。

###### 2) 学びの内容

第1回目は、昨年度寄せられた「学びたいこと」の上位にあった健康教育を取り上げ実施した。アンケート結果から得られた学びの内容としては、「健康教育充実のためのヒント・課題解決へのヒント」・「スキルアップのために自身で取組むことへの気付き」・「若手養護教諭が育っていくために取組むこと」・「若手養護教諭が育っていくための障壁」等があげられた。以下に例示する。

###### 第1回「養護教諭学びの会」

<健康教育充実のためのヒント・課題解決へのヒント>

- ・健康教育について、担任の先生方への働きかけが難しいと思っていたのでとても勉強になった。

- ・先生方の意識を把握することの大切さを知った。協力を得るためには、少しでも先生方と関わり、話す時間を作ることで、そしてどんなことを子どもたちに指導したらよいか具体的に伝えていきたい。
- ・健康教育は、養護教諭一人だけで実践するものではなく、学校職員と連携して行うことが重要であると学ぶことができた。学年主任の先生や担任の先生に対して、どうアプローチしていくとよいか、今の勤務校で実践していくには、どうしていくとよいか考えることができた。
- ・まずやってみる。そしてうまくいかないことは、工夫して考えながら次に進むように、少しずつステップアップしていく。
- ・中学校勤務の中で、健康教育を行うことにいつも難しさを感じていた。どんな戦略で先生方に働きかけていくのか、子どもへの指導を行うとよいかを考える機会になった。
- ・「子どもが一番」と思って日々働いているが、そのためには教職員を上手に動かすことや、意識を変えることが大切だと改めて感じた。
- ・教職員の役割を明確にして健康教育の提案をするということに目からウロコだった。組織を大切にしていたつもりだったが、まだまだ工夫が足りないと自分を反省した。
- ・学校にあるすべてのことが良くも悪くも子どもに影響していくので、できることすべてをやっていると思った。
- ・保健だよりからも相方向で働きかけることができるとわかった。すぐ実践したいと思った。
- ・生徒への健康教育実施にあたり、どうしても自分一人ですることをしていこうと考えがちでなかなか効果が上がらないと思っていた。先生方と連携していく大切さを改めて実感した。本校にあった先生方との連携の在り方について考え、実践していきたいと感じた。
- ・健康教育を実践していく上で、どのように計画し、どの人を動かしていくとよいかなど良いアイデアを教えて頂いたので、まずやってみようと思った。
- ・今回の講話で、少しできそうだ（保健だよりの工夫など）と思うこともあり、是非執務に加えたい。ここまで出来たら子どもたちは変わるなどという見通しがもて、実践への意欲が湧いた。
- ・グループディスカッションの中で、個別指導では良いことを伝えてほめていくことが大切だと再確認した。1日1回でも声をかけ、関わっていきたい。

#### <スキルアップのために自身で取組むことへの気付き>

- ・実践したことを記録に残すこと、自分の実態をしっかり把握することが大切なのだと感じた。
- ・研修会への積極的な参加。
- ・計画的に取り組むことや、人との関わり方を大切にする。
- ・日々の仕事、実践の振り返りをおこない、管理職の方にも評価をしてもらう。
- ・自分だけでやらない。先生方を巻き込んでいく事が本当に先生たちのためにも、子どもたちのためにもなると再確認した。一方的にならないように意見を聞き一緒に進めていくように心がける。
- ・一人職だからこそ、同じ養護教諭の先輩や友人を大切にしたい。
- ・もっとベテランの先生方にいろいろ質問したり、自分の考えを伝えたりする機会を増やす。

#### <若手養護教諭が育っていくために取組むこと>

- ・先輩養護教諭との交流の機会がたくさんあること。
- ・困っていることや分からないこと、現在に至るまでの背景について知らないことが多いため直接聞ける場があるとよい。
- ・自分のしていることを交流し、よりよくなるようアドバイスをいただく。
- ・話をするを大切に。自分のこと（実践も含む）を言葉にして誰かに伝えることが育つことにつながるのではないかと考える。

#### <若手養護教諭が育っていくための障壁>

- ・“一人職”であることを考えると他から学ぶ機会は少ないと思う。
- ・「こんなことを言ったらどう思われるだろう・・・」とか「こんなこと質問してよいのだろうか・・・」と思って聞けないことが多い。
- ・今後「働き方改革」の名のもとに、養護教諭部会の回数、時間もどんどん減っていくと、ますます学ぶ場が減少していくのではないかと危惧する。

#### <養護教諭像の醸成>

- ・組織の一員としての養護教諭の機能や求められる役割について考える機会となった。
- ・養護教諭一人で実践を進めていくのではなく、学校職員と連携して行うことが重要であると学べた。

#### <悩み・葛藤の共有>

- ・職務上の課題や悩みを共有すること、相談できたこと、助言が得られたことで解決の糸口が見つかった。視野が広がり、前向きに取り組むもうという思いになる。知り合いが増えることが嬉しい。
- ・悩みを聞いてもらいアドバイスをもらうことでモチベーションが上がる。

### 3) 研修テーマ・研修内容の評価

第1回学びの会では、11名から回答があった。研修会のテーマ・内容ともに「良かった」は11名(100%)

であった。次回研修会への参加希望は「是非参加したい」は11名（100%）であった。「スキルアップにつながる研修会を継続してほしい」「ディスカッションの中で考えることや気付くこと、直接教えてもらう機会になる。経験年数の異なるメンバーでのディスカッションも良い」といった意見があった。また、「ベテラン養護教諭の経験を聞くことで、自身の考え方や実践を振り返ることも勉強になるが、健康教育のように知りたいことを学べるような研修会も良いと思う」といった意見があった。学びの会への満足度や期待は高い。研修内容については何に焦点を当てた研修にするのか、研修のつながり等を考慮し検討していく必要がある。

## V. 参加看護職の意見と成果

今回は、方法論的な側面からの研修であったが「これまで様々な実践をしてもすっきりしなかった課題に対して、まったく違う視点を教えてもらいどのように解決していくかのヒントを得た。次年度の実践を変えたい。」「思いもよらなかった視点で見直すと、改善の方法がたくさんあることが分かった」といった意見が出された。目の前にある課題に対して改善するための方法論を検討することは、経験年数の有無に関わらず必要なことであることが確認された。ベテラン養護教諭が、ある程度の実践を積んでいる中で感じる課題と、経験年数の浅い養護教諭が感じる課題には、若干の差があることは予想されたが、どのように講師からの講話を聴くのかといった視点の置き方によって、学び方を変化させていることが講話後のディスカッションから確認された。方法論的な学びは、一見すると事実的な知識や対応スキルを身に付けることと思われがちだが、課題をどのように捉えるかによって、論理的な学びへと広がる可能性があることを実感した参加者が多かった。

ベテラン養護教諭と教員との意見交換から、若手養護教諭が抱く現状の課題を解決するために、方法論的な学びは必要であり、事実的な知識を身に付けるためには有効であること。若手養護教諭には効果的な学び方であることが確認できた。加えて、ベテラン養護教諭にとっても、経験の中で習得した事実的な知識をもとにリアルな課題（講師が経験し、参加者も経験しているであろう実践上の課題）を解決する方法を考えていくことで、転移可能な概念的な知識を得ることにつながっているのではないかといった意見があった。経験年数が混在した参加者の中で学んでいく経験が、個別的なスキルを実践の中で身に付けることにつながり、ベテラン養護教諭が学んだことを共有したり、アドバイスを受けたりすることによって、複雑なプロセスに対応できるスキルを自ら見つけているのではないかと感じられた。

学びの会では対象者を経験年数4～6年目としているが、実際の参加者の経験年数は幅の広いものとなった。経験年数の混在する学びの場であることが、自身の課題に向き合い、自身で解決していくことを考える場になっている。この経験を繰り返すことが迷いや葛藤の時期を越え、スキルアップへの意欲や、その後のキャリア形成に大きく影響するのではないかと意見が出された。これまで受け身であったスキルアップから「自分の実践を発表し、評価やアドバイスを受けることが必要」「自分の考えを言葉にして伝え、自分からベテランの先生に意見を求めていくことが必要」といった発言が示すように、能動的なスキルアップへ変化させていくことの必要性を感じた参加者が増えた。参加者のスキルアップに向けた意欲は高くなっていることが推察される。スキルアップや養護教諭像を醸成していく過程は、様々な気付きによって本人の内面に起こる変化によるところが大きいと考えられ、経験年数の多い養護教諭の実践等に触れること、経験年数混在型のディスカッションはその役割を果たしているといえる。自身のこれまでを振り返ることや、これまでにない気付きを得ることを通して養護教諭像を模索していく過程が重要である。そうした過程がスキルアップへのきっかけになったり、養護教諭像の再構築に影響を与えたりしていることが確認できた。

研修を重ねる中で、校種や地域を超えた養護教諭同士の学び合いのネットワークづくりに発展していることを実感する参加者も多く、「この会でつながることができた養護教諭と、一緒に学ぶ機会が増えた」といった発言もあった。これまでの経験年数別の悉皆研修等で得られた学びとは質の異なる学びに発展していることが参加者間で共有された。

## VI. 教員の自己点検評価

### 1. 実践の場にも与えた影響

講義やディスカッションにより自身の実践を振り返るきっかけとなり、実践上の課題に対する解決方法のヒントを得たり、どのように改善できるかを考えたりする姿が見受けられた。ディスカッションの中で、積極的にアドバイスを受け自身の実践を確認している参加者も多かった。養護教諭に共通する課題に対して、相互研鑽を意図した展開が実施されたこともより達成感のある学びにつながったのではないかと感じられた。自身の職務内容の充実に向けて主体的に考え改善していく意欲につながったことは評価できる。加えて受け身のスキルアップから、能動的なスキルアップの必要性を感じる若手養護教諭が増えたことも、本事業の目的に迫るものであるといえる。

1校に1～2名の養護教諭の場合、校内で実務能力の向上を図る機会は極めて少ない。ミドルリーダー

ークラスの養護教諭であっても、若手養護教諭に対して指導助言をする経験の少なさからか、若手育成への実感が伴わない状況が見受けられた。しかし自身の実践を伝える機会を持つことで「若手を育てる立場になったことを実感した」「どのように伝えたら若手の学びになるのかを考えるようになった」という発言が示すように、経験を踏むことでミドルリーダークラスの養護教諭の側にも変化が生じることも確認できた。ミドルリーダーとしての経験を得る機会の提供は、ミドルリーダークラスの養護教諭にとっての養護教諭像の醸成を促すことにつながったのではないかと思われる。

## 2. 本学の教育・研究活動に与えた影響

今回の研修による養護教諭の学びを知ることは、養護教諭に関係する科目の充実・改善や、養護実習で何を学ぶかを検討していくうえで大変意義のあるものになった。基礎教育に当たる部分と実践をつないでいくための学修の在り方を考えるうえでの貴重な機会となった。また、卒業後の支援につながるだけでなく、広く現場の養護教諭との関係を作るうえでも有意義であった。

## Ⅶ. 今後の課題、発展の方向

養護教諭に特化した学びの会を継続していくことは重要であり、本事業を実施することの意味は大きいことが確認できた。今後、スキルアップを図ることや、養護教諭像を醸成していくために会の内容を現状に近づけていくことが必要になる。学びを深めていくことによって、受け身のスキルアップから、能動的なスキルアップへ変化させていく必要性を感じる参加者が増えていること、ミドルリーダークラスの養護教諭の経験の場を増やすことを視野に入れた事業にしていく必要がある。

経験年数に関わらず、自身の実践を伝えることによって得られるスキルアップの過程があり、評価を得ることによって生まれる達成感や満足感も、スキルアップや養護教諭像を醸成するために必要なことだと感じる。経験年数が混在する学びの場を意図的に提供していく中で、経験年数に準じた学びができるような会の構成を検討していく。また、校種にとらわれず学びが広がるように、地域の養護教諭と協働して取り組める事業にしていきたい。